# 高校生を対象とした思考力を育む保健学習の検討

## ―「欲求と適応機制」の授業を通してー

篠崎　惇哉（鹿児島大学大学院）

### 1. 目的

本研究では、高校生を対象に「欲求と適応機制」の単元において、物事を分析的に捉え多様な観点から考察する思考力を育むことを目的とした保健学習の授業を実践し、授業前後における記述式テストの回答、授業後の深い学びに関する質問紙調査および感想から授業の効果を検討することを目的とした。

### 2. 研究方法

1）対象者

県立高校に在籍し、授業前後の調査すべてに回答を得ることができた71名（男子54名、女子17名）とした。

2）調査方法

2019年7月に生徒の実態を把握するために「保健の学習に関する事前調査」を行い、2019年12月に授業を実施した。生徒の思考力は、欲求と適応機制に関わる記述式テストの回答から評価した。 評価の際、模範解答を作成し、回答された記述文に授業のねらいに沿った観点を設けた。また、授業後には、深い学びに関する質問紙調査と授業の感想を求めた。

3）分析方法

記述式テストでは、生徒の回答から、本研究で設定した観点で記述できている者の割合を算出して、$\chi^2$検定を用いて授業前と授業後の比較を行った。

なお、統計処理は、IBM SPSS Statistics26を用いて実施し、統計的有意水準は$p<0.05$とした。深い学びに関する質問紙調査は、質問項目別に回答割合を算出し、単純集計（%）を行った。授業後の感想は、考察の恣意性を排除し客観性を向上させるために、計量テキスト分析ソフト「KHcoder ver.3」を用いて分析を行った。

### 3. 結果と考察

記述式テストでは、すべての項目で授業後に回答割合に有意な増加が認められた。このことから、学習したことを具体的な場面と比較したり、根拠を示したりしながら分類する活動を取り入れることで、基本的概念の理解を促し、知識に基づいて分析する思考力が育まれることが示唆された。

表1 記述式テストにおける4つの観点の変化

（%）

| | | | 記述あり | 記述なし | 合計 | P値 | | | 記述あり | 記述なし | 合計 | P値 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 問1 | | | 合理化（攻撃） 授業前 | | | | | | 適応機制 授業前 | | | |
| | 授業後 | 記述あり | 18.3 | 43.7 | 62.0 | 0.001* | 授業後 | 記述あり | 4.2 | 47.9 | 52.1 | 0.001* |
| | | 記述なし | 0.0 | 38.0 | 38.0 | | | 記述なし | 4.2 | 43.7 | 47.9 | |
| | 合計 | | 18.3 | 81.7 | 100.0 | | 合計 | | 8.4 | 91.6 | 100.0 | |
| 問2 | | | プラス面 授業前 | | | | | | マイナス面 授業前 | | | |
| | 授業後 | 記述あり | 19.7 | 26.8 | 46.5 | 0.001* | 授業後 | 記述あり | 5.6 | 31.0 | 36.6 | 0.001* |
| | | 記述なし | 2.8 | 50.7 | 53.5 | | | 記述なし | 1.4 | 62.0 | 63.4 | |
| | 合計 | | 22.5 | 77.5 | 100.0 | | 合計 | | 7.0 | 93.0 | 100.0 | |

*$p<0.001$

深い学びに関する質問紙調査では、すべての項目で肯定的回答の割合が高かった。これは、授業実施5か月前に事前調査を行い、生徒の実態を把握し、市川（2008）の「教えて考えさせる授業」の基本的特徴を捉えた授業設計が深い学びを実現させ、肯定的な自己評価に繋がったと推察される。

授業後の感想からは、欲求と適応機制に関する理解を深めている記述が確認され、記述式テスト、深い学びに関する質問紙調査の結果を支えるものであることが示唆された。

### 4. 結論

学習したことを具体的な場面と比較したり、根拠を示したりしながら分類する活動を取り入れることで、基本的概念の理解を促し、知識に基づいて分析する思考力が育まれることが示唆された。

### 5. 主な参考文献

1）森昭三・和唐正勝：新版保健の授業づくり入門,331-339,大修館書店,東京,2002